

# 思い方の違い

KIMI ORR (旧姓 金村紀美子)



# 「思い方の違い」

23期 KIMI ORR (旧姓 金村紀美子)



あるお方からお手紙をいただきました。

私は若い時から外国に住むことを希望しておりました。仕事の関係で短時間の海外には何十回と行きました。学会参加が目的で会場とホテルの往復で用事が済めば即、帰国のパターンでした。本格的に留学が現実になったのは55歳過ぎてからでした。オーストラリアに3か月滞在し、UK(英国)に1年弱滞在していました。英語が堪能であれば日本に帰る気はなく、アメリカに渡るつもりでしたが、語学の習得は大きな壁でした・・・云々

この手紙を大変興味深く拝見しました。「英語が堪能でなかったので行けなかった」と言っておられます。私は英語を知らなかったからアメリカに行く決意をしました。思いが全く逆で、もし私がこの方の考えだと、決してアメリカにたどり着くことはなかったように思います。この方(Aさん)はすでにドクターであり、海外の学会にも参加されたり、英語圏の国にも何カ月も滞在の経験がお有りて、日常会話には事欠かなかったはずである。今思うに彼の『英語堪能』ということに関する意味合いは、医学的な知識のことを言われているようである。もちろん私が求めていた英語知識とは格別の差がある。



「思い方」にもいろいろあって、思い方ひとつで人生はかえられていく。私が外国で生活するようになったのも、思い方からの自然の流れであるように思う。

それも私が経験して分かったことであって、この思い方の違いから知り合ったアメリカの軍人と結婚し、アメリカに住むようになりました。その後の生活を少しずつたどってみたいと思います。

## 初めてアメリカに足を踏み入れた



韓国に2年住み、そのあと神奈川県相模原で3年滞在しました。結婚6年目にして、初めてアメリカに足を踏み入れたのはなんとサンフランシスコでした。上の娘、「奈緒美」は4歳になり、次女の「えみり」は3歳であった。サンフランシスコ湾に囲まれた軍事基地は何とも言えぬ壮大な感じであった。我が家の裏庭から湾の全景が一望できる。左側にゴールデンゲイトが見えるばかりか、徒歩で行ける近距離にある。右側には、はるか彼方にオークランドブリッジが有り、岸からそんなに遠くないところには小さな島、Alcatraz（アルカツラツ）が有り（ここは以前の刑務所で有ったところである）、週末ともなるとどこからやってくるのか数えきれないほどの白い帆を掛けたヨットが、陽光を浴びながらゆったりと湾上に浮かぶ光景は、まるで別世界にいるような錯覚を起こさせる。世界大会のヨットレースもここで行われる。

この風光明媚に恵まれた環境に加え、外務大臣の到来があり、彼らの演説の音が我が家の裏庭まで聞こえてくるこの驚きに、はかり知れないほどの満喫感を覚えた。





# 頭にしっかりとめ込まれたテストコースの戸惑い

ここで私が最初にしなければならないことは車の免許を取得することであつた。それまで運転の経験はなかつた。車の教習所はゴールデンゲイトを渡った向こう側にあつた。最初は路上で車の練習をしていたが、「実際に実地試験が行われる場所で練習したほうがよかろう」ということでテストの日までそこで練習した。なぜか夫は私に毎日同じコースで練習させた。まるでテストのコースで本番をしているかのように。

そのコースはしっかりと私の頭に叩きこまれてしまった。自信満々でテストの日に臨んだ。ところがその教習所の試験官は私の頭に叩き込んであるコース通りに行かないので、なんだか落ち着かなかつた。左側に行けばいつも練習していたコースなのに、彼は右側に行こうとする。それが気になり、左側のほうを指さしながら

「こちらの方向に行かないんですか？」と聞いたら

「NO」と言われた。

彼の言われた通り右に曲がつた。すぐまた十字路に出くわした。試験官はそこをまっすぐ行くように言われたが赤信号だったので車を止めた。その日どういうわけか車も人の通りも無かつた。暫く信号の色が変わることは無かつたので、こんな状態だったら赤信号でも進んでもよさそうなのにとつたのでそれほど深く考えずに

「今、前進してもいいでしょうか？」と尋ねたら、すかさずその試験官は「I don't know」とぶっきらぼーに答えた。そんな彼に呆れられるような質問をしながら、どうにかこうにか無事合格したのであつた。





## 慣れない車の運転に四苦八苦



その二週間後、夫は突然選ばれて「ポリグラフ（うそ発見器）の試験官」になる為にサウスキャロライナの学校に行ってしまった。半年間は帰ってこない。車の免許証取り立ての私にはやはり不安であった。夜が白々と明けるころに娘たちが寝ているのを確かめ、しっかりとドアに鍵をかけ、車を街中に走らせた。運転を兼ねて街の地理を覚えるためである。

車の少ない早朝の街並みは、免許取り立ての私にとってドライブするのは快かった。

今、自分があこがれのサンフランシスコの街の真ん中をドライブしているなんて思いもよらず嬉しかった。何日何度か繰り返しているうちに気楽に運転できるようになり、娘たちが起きているときは残して置くわけにも行かないので連れて出たが、やはり緊張した。帰宅途中、車を左側の車線に変えようと方向指示器を出しながら車線がクリア（安全）になるのを見計らってハンドルを左側に向けた途端、突然車が表れてフルスピードで私の車をかすめるように通り過ぎた。



思わぬことで気が転倒しそうになり、体の震えが止まらなかった。車をすぐそばの安全ゾーンに停止させた。ただ事故がなくてよかったと胸をなでおろしながらも、一年間の疲労がいっぺんに押し寄せて来たようで、しばらく車を動かすことが出来なかった。



奈緒美が幼稚園に入る時期になり、街中にある学校に連れて行かなければならない。週末の早朝学校への行き方を覚えるために練習した。私は地図を見ながら探しながらの運転はできない。

はっきりと目的地までの道順を知っていないとダメなのである。いざ学校に行く日がやってきた。週末早朝の時間帯と、週日の8時半のラッシュアワーの道路状況は大変な違いであった。この想像もできぬ混雑さに圧倒された。何とか学校まで送り届けたが、次には無事帰れるだろうかと心配であった。えみりが基地のプリスクールに行っている間、奈緒美のクラスで先生のヘルパーをした。ストーリーの時間、奈緒美はいつも一番後ろに座り、先生の質問に静かに手を挙げ、いつも正しく答えていた。その間、他の子供たちはうるさかった。『みなさん、奈緒美を見習いなさい！』先生が大声で言っていた。

帰り道、サンフランシスコの街中はラッシュアワーの時間帯でなくても混んでいた。緊張して運転しながらも、知らなかった娘の一面を思い出していた。

## 最後の晩さん会



Thanksgiving Day（感謝祭）の日がやってきた。サウスキャロライナにいるJohnは帰って来ない。フロリダはバスで行けるがサンフランシスコまでフライトする金もない。アメリカに来て家族初めてのThanksgiving少しがっかりしたが、金銭的なことを言われると何も言えなかった。

英語の先生にターキーの作り方を教えてもらい、娘たちに手伝ってもらったターキーは、最高の出来栄であった。曲りなりに正装して娘たちと今まさに小さな“晩さん会”が始まろうとしたときドアのベルが鳴った。誰だろうとドアを開けてみると、素晴らしい豪華な花束が贈られてきた。Johnからである。この日のために帰れなかったことをすまないと思っただろうと思いがよぎった。



思わぬ“訪問者”に晩さん会のテーブルはより華やかになった。

「ママ、you made a great Turkey!

(ママのターキーは最高よ!)」

奈緒美が嬉しそうに言った。

二人の娘たちと祝った初めての晩さん会、

これが奈緒美との“最後の晩さん会”である

ことを知る由もなかった。



## 距離が空くと心も自然に距離を感じる



アメリカで生活を始めたころ、すべてのことに無知であった私にとって毎日が学びでした。学びによって無知が少しずつ解明されて行くことに生活の意気を感じました。軍隊の生活は3年ごとに移動しなければならない。十何回ぐらまで数えていたが、もう20回近く引っ越ししているのではないだろうか。いつもよく人から言われた。折角環境に慣れたと思えばすぐまた、引っ越しするなんて、新しいところで又初めからやりなおすのに、とてつもないパワーを要する。それは大変なことだ。

幸いにしてこのライフスタイルは私にピッタリであった。場所が変われば状況も変わる。確かに又、いちいちかたづけるのは大変だけど、それだけの価値はある。新しい人たちとの出逢いに胸を膨らませ、新たな場所への生活に期待する。過去のいやな思い出は過去の場所に残しておく。

肩もこることなく快適な気分である。

今までたくさんの出逢いがあった。

しかし距離が空くと心も自然に距離を感じるものだと教えられた。







言葉の壁でアメリカに行くことを断念されたAさんは、それから何年かのち多大なご苦勞をされながら「博士号」を獲得されました。いつもきちっと目的を持ちそれに向かって着実に努力され邁進される姿はどこに行かれても変わることなく、自分の決意を達成されるお方だと思いました。たとえアメリカに行かれたとしても、やはり博士号獲得に「刻苦精勵」の努力された方だと思います。このAさんに深き敬意を表します。

## 思い方の違いで状況は変わる。



国際結婚して40年以上も過ぎると、困難であった経験もごく自然に流されて行くようである。

アメリカ人は個人主義である。家族がいても自分本位なのである。結婚と離婚は隣りあわせといっても過言ではない。問題の解決は離婚が最善の結論だと思っている。結婚40年だといえ、Are you okay? (離婚しなくても大丈夫なの?) というアメリカ人。そのようなことをいう人の2回目のご主人、私から見ると何かおかしい。我が家でも離婚問題はしばしば持ち上がった。俺はおまえと離婚する! 月曜日に弁護士のところに行っ来い。(あなたが離婚したいんだから、あなたが行けばいいじゃない、なんで私が行かなければならないの?) もちろん声なき声で彼に言葉を突っ返す。(心変わりするなよな) と言っていた夫も結婚何十年もたつと妻を見る目も変わってくる。俺は離婚するなどといった覚えはないとうそぶく。夫を見てこの人少しおかしいのではと、でも周りの人を見まわしたときみんなおかしい。そうなんだ。こんなもんなんだと妥協する。感情が高ぶっているときは自分の欠点は全く考えなくて、相手の欠点ばかり攻める、でも自分もおかしい一面があるんだと気が付いたとき深く反省する。この思い方違いですべて状況が変わっていく。



# PHOTO ALBUM

えみりの娘  
奈緒美 10か月



くみの息子  
Davin 7歳



仲よし兄妹



えみりの息子  
Elijah 3歳



ファミリーで